

日本文体論学会
第 119 回大会
プログラム

2023 年 6 月 24 日 (土)

於 杏林大学井の頭キャンパス (Zoom によるオンライン配信有)

日本文体論学会

日本文体論学会会員の皆様

新型コロナウイルス感染症が5類感染症に移行し、これまで制限されていたことから徐々にコロナ前の生活に戻ろうとしております。しかしながら、引き続き自主的な感染対策も求められ、新たな生活様式を模索する日々が続いております。

そして、今年は多くの学会が全面的に対面開催へと大きく舵を切る決断をしております。文体論学会では会長と大会運営委員で議論を重ね、対面とオンラインを併用するハイブリッド形式で大会開催をすることといたしました。前回、前々回の開催もオンライン、ハイブリッドにて開催をした実績があり、会員の皆様のそれぞれの事情に合わせて対面とハイブリッドが選択できるというメリットがあると考えております。

最近では AI による技術革新がすさまじい勢いで迫ってきておりますが、テキストを読み解く感性は私たち人間にしか持ち得ないものであり、読み解いたプロセスを互いに述べ、議論をすることも私たちにしかできないことだと考えています。今まさに文体論的発想法がテキストの理解に必要なのです。

会員数が徐々に減少し、学会の先行きも見通すことが難しくなっておりますが、会員の皆様の研究を支える役割を担っていただけるような取り組みをしていくつもりです。諸先輩方が築き上げた文体論学会を守り、そして発展させていく1年になることを願っております。そのためにはお時間の許す限り、研究発表にご参加いただきご意見をいただければ幸いです。

今回は「ドイツ語、日本語などの事例を参照して見えてくる文体論の大いなる可能性」と題し明治大学の渡辺学先生による特別講演が行われます。改めて文体論研究の魅力を会員の皆様と一緒に考える機会にいたしましょう。

2023年5月
日本文体論学会
会長 倉林 秀男

日本文体論学会第 119 回大会

日時：2023 年 6 月 24 日（土）

会場：杏林大学井の頭キャンパス D105 教室（オンライン配信有り）

※オンラインで参加される場合、6 月 21 日（水）までに、事前申し込みを
お願いいたします。登録いただいたメールアドレスに、Zoom のミーティング
情報をお届けいたします。



○右の QR コードまたは[こちら](#)からお申し込みをお願いいたします。

10:00 受付

※オンライン参加の方は、お名前を日本語（漢字・ひらがな・カタカナ）で表示いただくことで、
受付に代えさせていただきます。

10:30 開会

開会のことば・会場校あいさつ

会長 倉林 秀男（杏林大学）

司会：立川和美（流通経済大学）

研究発表（発表時間 25 分、質疑応答 10 分）

(1)10:40 行田英弘（日本語：北海道大学[院]）

「翻訳小説における語り手の人物造型―『嵐が丘』2 邦訳を例に」

(2)11:15 鐘 紫儀（日本語：東北大学[院]）

「逆接の接続詞の文体混用を通してみる記事の内容と構造特徴」

12:10 総会

研究発表（発表時間 25 分、質疑応答 10 分）

司会：八木橋宏勇（杏林大学）

(3)13:00 高久真由美（仏語：東京大学[院]）

「Raymond Radiguet *Le diable au corps* の認知言語学的分析」

(4)13:35 渡邊幸佑（日本語：兵庫教育大学[院]）

「説明的文章のキーセンテンスを捉えるための読解方法の有効性評価」

特別講演

14:30 渡辺 学先生（明治大学）

司会：吉田卓（大阪学院大学）

「ドイツ語、日本語などの事例を参照して見えてくる文体論の大いなる可能性」

15:50 閉会のことば

16:00 特別企画 ―学会誌編集委員経験者と話してみよう―

―大学院の先にある仕事やキャリアをこっそり教えます―

【お知らせとお願い】

◎大会に関する問い合わせは【yagihashi@ks.kyorin-u.ac.jp】までメールでお願いいたします。

◎当日、キャンパス内の学食（F 棟 1 階）は営業しております。

◎総会も Zoom で参加いただくことができます。会員の方はご出席ください。

【学会事務局からの重要なお知らせ】

大会や学会誌投稿のご案内は、メールで配信しております。学会事務局にメールアドレスをお届けになられて
いらっしゃる方は、お手数をおかけして申し訳ございませんが、学会事務局 (buntairon-post@infotec.co.jp)
へ電子メールでご一報ください。件名は「メールアドレス登録」としていただけますと幸いです。

研究発表要旨

(1) 「翻訳小説における語り手の人物造型―『嵐が丘』2邦訳を例に」

行田英弘（日本語：北海道大学[院]）

本研究では、エミリ・ブロンテの『嵐が丘』の邦訳のうち、鴻巣訳（2003）と河島訳（2004）を取りあげ、語り手たちの人物造型の対照分析を行う。

文体論の枠組で日本語の再翻訳を論じる事例研究の提供が目的である。同一原文から生成される異なる訳文を、ことばに重きを置いて分析することは、言語事実に即して翻訳を評価するモデルを構築してゆく上での文体論の応用可能性を示す意義がある。

研究方法は次のとおりである。まず、語り手たちに対する訳者の印象を「あとがき」で確認する。その上で、人称表現・間投詞・語彙のレジスタ・感嘆符の使用について、原文と両訳を対照する。次に、平均文長と語彙の多様性を比較する。

分析を通じて、文章語や感嘆符の多用等により、語り手たちは、河島訳よりも鴻巣訳において、より古風で感情の振れ幅が大きい人物として演出されていることを明らかにする。後者では有標なことば遣いにより、「ことばは達者だが洞察は鋭くない観察者」としての語り手の個性（クセ）がより際立つ。これにより鴻巣訳では「語り手が、自ら語る事態を正しく認識していない」という『嵐が丘』の構造的アイロニーが強調されていると指摘する。

今後は、他訳についても同様のあるいは別角度からの分析を行い、各訳の特徴を記述的に浮かび上がらせたい。

(2) 「逆接の接続詞の文体混用を通してみる記事の内容と構造特徴」

鐘 紫儀（日本語：東北大学[院]）

本発表では、新聞記事の内容展開の仕方を逆接の接続詞の文体混用という現象を通して考察する。日本語の接続詞の使用が文体と関わることはこれまで指摘されてきたが、一つの記事において、書き言葉的な逆接の接続詞「だが」「しかし」と話し言葉的な逆接の接続詞「でも」「なのに」が混在している現象が見られる。しかし、新聞記事における逆接の接続詞の文体の選択は記事の構成要素との関わり、記事の各部分の内容における逆接の接続詞の使用の特徴については明らかになっていない。そこで、本発表では、朝日新聞のデータベースを利用して、逆接の接続詞の文体混用が出現する記事を収集し、逆接の接続詞の文体選択と記事の内容構造の関わりについて考察する。その結果、記事における表現の切り替え、文体の変化によって、記事の各部分の内容の境界が明らかになった。逆接の接続詞の文体混用は、記事のリズムと読者との親密さの調整と関わりがあることを指摘する。記事における逆接の接続詞の文体混用を通して、記事における一般的事象と個人的経験の内容をよりよく提示することができ、情報を読者にわかりやすく伝達できると予想される。

(3) 「Raymond Radiguet *Le diable au corps* の認知言語学的分析」

高久真由美 (仏語：東京大学[院])

本研究では、Raymond Radiguet の一人称小説 *Le diable au corps* (1923) を対象として、認知言語学的観点からのテキスト分析の実践例を提示する。Gavins and Steen(2003)や 西田谷・浜田(2012)など、文学テキスト分析に認知言語学の視点を取り入れる研究は存在するが、フランス文学作品での試みはいまだ少ない。また、作品の分析や解釈はテキストと読者双方が存在してはじめて成り立つ行為であるが、語り手と読者の認知構造を分けて検討した研究はさらに少ない。近年、認知・教育心理学分野においてテキストを図式化することの学習における有用性が認められている(岩槻 2003) ことをふまえて、語り手と読者、双方の認知過程およびその融合・解釈の創発過程を図式化することで、文体論研究手法の教育分野へ応用の・導入をめざし、文体論研究の裾野を広げる第一歩としたい。方法としては、まず語り手による認知過程を Danciger(2012)の narrative space 理論によって構造化する。次に読者による物語の受容の過程を、Fauconnier and Turner (2002)の概念ブレンディング理論を用いて分析する。具体的には、*Le diable au corps* をロビンソナードのなかに位置づけて読む。(*Le diable au corps* をロビンソナードに位置づけた先行研究は現状確認できない。)読者の既有知識「ロビンソナード」と、『肉体の悪魔』の語りの構造の融合を、概念ブレンディング理論によって説明し、テキスト全体を通して「語り手『僕』を漂流者として二重の島を旅する構造をなしている」という新たな解釈を提示する。

(4) 「説明的文章のキーセンテンスを捉えるための読解方法の有効性評価」

渡邊幸佑 (日本語：兵庫教育大学[院])

説明的文章のキーセンテンス(要点として重要な文)を捉える読解方法として、大西(1981)、樺島(1983)や川西(2014)がある。しかし、これらの読解方法でどの程度正確に要点として重要な文を把握できるか、定量的な評価はされていない。そこで、本研究では、従来の読解方法の有効性を定量的に評価し、改良し、現状最も有効な読解方法を提案する。

いくつかの文章サンプルについて、本来要点として抽出すべき重要な文(正解文)を人手で設定した。正解文の数は、1文、並びに、文章全体の文の数の10%、30%、及び50%(以下、抽出率10%などと言及)とした。正解文と従来のキーセンテンスの一致度を、再現率、精度、F値で測った。F値が高いほど読解方法の有効性が高い、と判断した。

その結果、1文抽出、抽出率10%、及び抽出率30%の場合、樺島(1983)の方法が最も有効であった。抽出率50%の場合、川西(2014)の方法が最も有効であった。

ただし、樺島(1983)の方法の精度は低かった。そこで、精度向上のため、佐久間(1989)の「統括」という観点を踏まえ、樺島(1983)拡張版を提案した。樺島(1983)拡張版は、樺島(1983)と比べ精度が向上し、現状で最も有効な読解方法となった。

授業での実用性は今後の検討課題である。

特別講演

「ドイツ語、日本語などの事例を参照して見えてくる文体論の大いなる可能性」

渡辺学先生（明治大学）

日本文体論学会の会員はもとよりわれわれは言語使用者として日々「文体」（文脈によっては「様式、スタイル」）の問いに対峙し、その都度自らの課題を解きつつ生を営んでいる。この営為の中心に位置付けられるのは「文体調節・調整」であろう。一方で、文学研究でも言語学でも「文体論」はその本丸にあるとは言い難い。このこと自体が、「文体（論）の遍在」、言ってみればわれわれが“doing stylist”“をしていることを示唆しているようにも思われる。

本講演では、ドイツ語、日本語などの主として日常語・通用語に焦点を当て、可能なかぎりスラング研究にも言及しながら、文体逸脱、言語（変種）選択による文体効果の発現の実相を照射する。

その過程で、表現と意味、発話者の意図などといったいくつかの契機の関係性に目を向けながら、また「ことばと文化」の関わりにもふれながら文体論に開かれている領野を見はるかしたい。

特別企画

—学会誌編集委員経験者と話してみよう—

—大学院の先にある仕事やキャリアをこっそり教えます—

日本文体論学会には、様々な背景を持つ大学院生や研究者が集っております。大学院生の方、新規入会された方、各研究分野の最前線で活躍されている先生方、長く日本文体論学会の発展にご尽力くださった経験豊富な先生方が、ざっくばらんに交流する場を設けますので、もしよければ1時間ほどお話しませんか？

トピックは自由で構わないと思いますが、話のきっかけとして、若い研究者の方向けに以下2つのテーマをご用意いたしました。

○「学会誌編集委員経験者と話してみよう」

学会誌の査読のルールを、明かせる範囲で明かし、本学会誌ほか様々な学術誌に投稿する心理的距離を縮めるきっかけとなればと思います。

○「大学院の先にある仕事やキャリアをこっそり教えます」

大学非常勤講師や専任教員の採用、大学院生に知っておいてほしい大学教員の姿やキャリアパスについて、今後の学会活動の参考にもしてほしい情報をお伝えできたらと思います。

会場参加者向け 杏林大学 井の頭キャンパスへのアクセス方法

(最寄り駅は、中央線・総武線「三鷹駅」「吉祥寺駅」、京王井の頭線「吉祥寺駅」です。)

- **三鷹駅** (JR 中央線・総武線) の南口バス乗り場 (8 番) より「杏林大学井の頭キャンパス」行 (約 15 分)
- **吉祥寺駅** (JR 中央線・総武線・京王井の頭線) の南口バス乗り場より
 - バス乗り場 (5 番) 杏林大学井の頭キャンパス行 (約 15 分)
 - バス乗り場 (2 番) 千歳烏山駅北口行〈新川経由〉「新川」下車 (約 9 分)
 - バス乗り場 (3 番) 大沢行「新川」下車 (約 9 分)、武蔵境駅南口行〈大沢経由〉「新川」下車 (約 9 分)
 - バス乗り場 (4 番) 調布駅北口行〈神代植物公園前経由〉「新川」下車 (約 9 分)
 - バス乗り場 (6 番) 深大寺行「新川」下車 (約 9 分)、野ヶ谷行「新川」下車 (約 9 分)
調布駅北口行〈野ヶ谷経由〉「新川」下車 (約 9 分)

※「杏林大学井の頭キャンパス」行に乗車の場合、終点で下車ください。キャンパス中央にある神殿のような建物に向かって左側、3つ並んでいる棟の一番奥がD棟です。

※「新川」で下車する場合、左手に少し戻ると正門があります。キャンパス中央にある神殿のような建物に向かって右側、3つ並んでいる棟の一番手前がD棟です。

杏林大学 井の頭キャンパスマップ



日本文体論学会 事務局

〒206-0033

東京都多摩市落合 2-6-1 (株) インフォテック内

電話 : 042-311-3355 Fax : 042-311-3356 E-mail : buntairon-post@infotec.co.jp